

## はじめに

紙谷でございます。実は昨年しやうじのおあなの秋に、旧上九一色村にある精進御穴というところに、なかば拉致されるような形で連れていかれました。恐る恐る中を覗いてみました。私、暗いところとか、狭いところがきらいなんですけれども、しょうがありません。この精進御穴に参りまして、見て参りました。中にも入りました。おかげで、膝を擦り剥きまして、その傷がまだ消えていないという、あわれな状態です。

私が富士山関係の信仰にふれましたのは、西桂町で調査を依頼されたのがきっかけです。空胎上人くうたいという方の事績を調べようということだったんです。今から、30年以上も前のことですが、そのなかで、富士山関係のデータをいろいろ収集するという作業がありました。\*1

さて、精進御穴に参りまして、中に入りました。本当に入口が狭いんですね。会場の皆さんのなかで、精進御穴へいらっしゃったことがある方、どうでしょうか。ありがとうございます。ほとんど、いらっしゃらないですね。たいへんなところですが、一度お行きになってみては、どんなところか、見ていただくとよろしいのではないのでしょうか。近いうちに世界遺産センターから、きちっとした報告がなされると思いますので、そういうものをご覧になっていただければ、よろしいかと思います。溶岩でできた洞穴にして一私は洞穴というより洞窟と呼びたいんですが、狭い穴が地上に開いていて、そこから足を踏み入れようとしますと、すんと落っこちます。ずずずずずと、引きずられるように下の方に入っていきまして、そして中に入っていきまして、意外や、立って歩けるくらいのところが、だいぶございます。そのところを過ぎますと、また狭くなりまして、最後のところは、ほんとうに這はって進まなければ入れない。私、そこは遠慮させていただきました。出てこれなくなっても困りますし、あの世に逝っちゃった、なんていうことになりましたら、誓行徳山せいぎやうとくざんという行者さんのあとを追うことになってしまいます。私は、それほど修行をしておりますので、……。

それはともかく、誓行徳山という方は、文政10年といえますから、西暦1827年で

す。これまでの皆さんの話に比べますと、ぐっと今に近づいてくるわけで、江戸時代も後半です。この地でわざわざ断食の修行を「二八日」＝16日行いまして、さらに天保3年（1832）には、8月12日に籠って、21日後に私は逝くんだ、入定するんだ、というようなことを宣言いたします。そして、最後の21日目に、末期の水をくれと言われたのに、まわりはこれを渋ったんです。もう弱っていて無理だろうと。だから、水なんかいらんんじゃないかと渋ったところが、また水を望みましたので、水を差し出しますと、「浄化」した。つまり、浄らかにあの世に旅立ったというんです。<sup>\*2</sup> 精進御穴を離れるときに、世界遺産センターの方が、「こんなところで死にたくないなあ」と言いましたし、私にも「死にたいと思いますか」と尋ねられましたが、どうにも答えることができませんでした。「いや、死ぬ覚悟ができていませんから、こんなところで死にたくない」と正直に言えばいいんですけども、それでは失礼にあたる。では、いったい富士講の行者さんたちは、何を考えていたんだろうか。この研究会のなかに加えていただくときに、<sup>\*3</sup> 清雲先生が一当時、委員長をなさっていらっしゃったのですが、「富士山に登る人は、何を考えていたんだろうか。そういうことをきちんと議論することが、必要なだよね」とおっしゃいました。その答えをここで探したいなあというのが、今日の話の骨子となります。

## 1 精進御穴と入定の系譜

精進御穴では、江戸時代の中頃から終わりに近いわけですが、暫行徳山さんが入定している。実は、富士山で命を絶ちたいと考えた人たちは、何人もいるわけです。ちょっと順序は違いますが、年代順ではないのですが、「洞窟における修行と入定の継承」としたところに、お三方の名前をあげておきました。

まず、<sup>あんざん</sup>案山上人。この方につきましては、「甲斐国志」に詳しく書かれており、その死んだ場所なんかもしっかりしております。この方は延宝5年、西暦1677年に、富士山の山頂近くで入定なさった。それに先だって、富士山の麓で入定したとされて、この世を去ったのが、<sup>かくぎょう</sup>角行上人。長谷川角行さんです。富士講の開祖といわれる人物ですが、1647年（正保4）に、静岡県富士宮市の人穴と呼ばれる場所で命を絶っております。壮絶な最期であったと、書かれております。角行さんについては、あの方

でも触れますが、<sup>ふじほうえかいさんかくぎょうとうぶつくうごいっしゅうき</sup>「富士法会開山角行藤仏★御一生記」という文書、あるいは<sup>ごたいぎょうのまき</sup>「御大行之巻」といったものもございまして、これらは後の世に、教祖の伝記として、江戸時代の半ば以降に、まとめられたものですが、それらに詳しく書かれております。人穴で「角木」、四角い木の上に爪先立ちをするという修行をしたというんですが、その修行姿のまま、往生したというふうに書かれております。

あくまでも、「書かれております」です。大隅先生のお話にもありましたが、私としては、あったか、なかったかという議論にはしたくありません。と申しますのは、人々が信じてきたことでありますから、それをあえてそこで否定しても始まらないですし、逆にそれが事実かどうかということを確認する方法もございません。それはともかく、人穴にその「立行」をしたまま、また富士吉田市内には、角行の「立行石」というのがございますから、これもその一事例になると思うんですが、そういう修行の仕方があったということなんです。

それから、最も有名な方が、<sup>じきぎょうみらく</sup>食行身禄という方です。これはもう、歴史的にもはつきりしてございまして、その当時に書かれた記録がございまして、享保18年、西暦1733年ですね。その7月に山に籠ってなくなったと。

このうちの前のお二方、案山上人と角行さんは、洞窟のなかで入定する。また、身禄さんにつきましては詳しい研究が多数ございますから、ご存知の方も多いかと存じます。今日のところは、まずその人穴から、話を始めたいと思います。

## 2 人穴における角行の修行

人穴というのは、角行さんが籠るにあたっては、たいへん厳しい戒めがあったといえます。角行さんは、永禄元年（1568）に家を出て各地を遍歴し、常陸国で山伏の弟子となって、「お前は<sup>たつこくのいわや</sup>達谷窟へ行け」という啓示を受けます。これは岩手県の一関の近くの達谷岩屋ですね。ここへ行って修行しているうちに、「富士山で修行をなささい」というように、<sup>えんのおづぬ</sup>役小角に告げられたという。そして、富士登山を果たした後で、人穴までやって来まして、人穴に入ろうとしたけれども、「ここはだめだ」と土地の人に言われる。「どうしてか」と問うと、「人がそこに入ると、嵐や飢饉、病気の流行があるので、それは許されない」。そこで、前もって白糸ノ滝で長い修行をし

ます。すると、そこに老人が現れ、「人穴に入ってい」<sup>い</sup>と許可を与えたというんです。そして、瞬時に人穴に連れて行かれて、洞窟の中で修行することになった（「角行藤仏★記 全」）。\*<sup>4</sup>

ところで、「人穴」というのは、何だったのかという話なのですが、ここで「御見抜」と呼ばれる富士講の護符をご覧ください。岩波書店から出ております『日本思想大系』の第67巻、『民衆宗教の思想』という書物に収められている角行自筆とされる「御身抜」です。\*<sup>5</sup> この「御身抜」については、正直なところ、私も原本を見ておりませんので、詳しいことはわかりません。ですが、これを見てみますと、上の方に富士山が描かれています。その富士山の下に、「人穴浄土門」という言葉が入っています。小さい文字ですので、あとでルーペでもお使いになって覗いてみてください。ところが、下の半分を見ますと、鳥居が描かれていまして、一見すると鳥居から富士山を拝んでいるようなんですが、どうもそうではなさそうな感じがする。と申しますのは、上の方に人穴が書かれていながら、また下の方に「人穴」という文字が入っているんです。ちょっとわかりにくいのですが、この鳥居の脚と脚の間、下の方に丸が書いてあって、その丸の中の右側部分に「人穴」とあります。その上方には、説明になると思いますが、三行の文字で「極楽地獄、此穴ニ有、浄土門」と書かれています。ですから、人穴というのは「浄土門」、つまりこの世とあの世の境だよと、こういうことではないかと思えます。

### 3 「吾妻鏡」から「人穴草子」へ

ところで、富士の人穴というのは、実は、早くから知られておりました。すでに、「吾妻鏡」に人穴の記述が出てまいります。「吾妻鏡」と申しますのは、鎌倉幕府の正史ですから、何でそんなものに出てくるんだろうと思うわけですが……。簡単に申しますと、第二代将軍の頼家が、狩が好きで、あちこちで狩をする。伊豆の伊東崎に大きな穴があって、ここを探検してこいと、和田平太胤長<sup>たねなが</sup>という人物に命じます。そうしますと、胤長は剣を持っていきまして、大蛇を退治して帰ってきて報告する。これは建仁3年（1203）6月1日のことです。その同じ年の、6月3日、ですから、つい三日後ということになりますが、駿河国の狩倉<sup>かりくら</sup>に出かけた頼家は、人穴があるとい

うことを聞いて、新田四郎<sup>ただつね</sup>忠常という武将に、この中を探検してこいと命じたんです。忠常は主従6人で出かけて行ったんですが、家来たちは途中の大きな流れのところで、すくんでしまう。そこで大河の激流を渡るにはどうしたらいいかと悩んでいるときに、この剣を投げ込みます。そうしますと、「火光」=火の光があつて、そして「<sup>きとく</sup>奇特」が見えたといひます。この「奇特」が何であつたかということになりますと、土地の老人が言うには、「これは浅間大菩薩の御在所である」、「(そのような場所に立ち入るとは)なんて恐ろしい事だろう」と、そう告げられたというんです。つまり、人穴の奥には富士山の神様がいましたよ、そこに出現するんですよ、ということなんです。

では、こうした物語は何のために書かれたのか。時間が限られておりますので、簡単に言ってしまう。後述しますが、後に書かれた「人穴草紙」などの物語では、忠常は、頼家への報告に際し、「中のことをしゃべってはいけないよ」と言われたのにもかかわらず、全てを語ってしまうわけですから、罪が大きいわけです。そこでどうなつたのかと申しますと、この新田四郎忠常という人物は、9月6日に<sup>ひきよしかず</sup>比企能員の反乱に際して、つまらない事情から殺されてしまう。非業の死を遂げるんです。それからさらに、将軍頼家自身も、ご存知のとおり、伊豆に幽閉されたあと、病死するということになります。その死にかかわる部分については、あまり明確に書かれていません。「吾妻鏡」では……。ということは、要するに頼家は、本当に病気だったのか、はたまた暗殺されたのか、いくらでも想像できる部分がある、ということになります。北条政子との間に権力争いが生じていて、殺されたと考えてもいいのではないかと。それはともかく、この記事が「吾妻鏡」に書かれたのは、頼家の死を説明するため、わざわざ人穴探検のいきさつを、書かなければならなかつたんだということになります。乱暴な話ですが、私としては、そのように理解しております。\*6

たった数行の短い記事が、そこそこの物語になり、後の世には一室町時代以降ですが、「富士山人穴草紙」ですとか、「富士の人穴草紙」ですとか、「富士の人穴の草紙」という名前で、たくさん出版されます。そのなかに、この物語が書き込まれていきまして、一言で言ってしまうと、地獄めぐりなどをするようになる。<sup>にった</sup>仁田四郎忠常は一人穴草紙では苗字が「新田」から「仁田」に変えられます一、浅間の大

神、あるいは浅間大菩薩に連れられて、地獄を見て歩く、そんな構成になっています。

ところで、「人穴」という言葉は、中世、そんなにたくさん見られるわけではありません。しかし、長野県で伝えられている<sup>こうが</sup>甲賀三郎の物語でも、主人公が人穴に入っていくわけです。『<sup>しんとうしゅう</sup>神道集』という書物にまとめられたものがありますけれども、これによりますと、三男の三郎が父親から、兄二人を差し置いて、惣領の地位を与えられて朝廷に出仕し、春日姫という姫君をもらって帰ってくる。その春日姫が、ある時さらわれてしまいます。兄弟が狩猟に出かけたときのことです。兄弟は春日姫をなんとか探し出そうとして、日本全国の山を巡り歩きます。そして、最後にたどり着いたのが、<sup>たてしなやま</sup>蓼科山にある人穴であったというんです。甲賀という苗字が付いています。甲賀ですから、琵琶湖の東南の甲賀郡ということになりますけれども—2004年には甲賀市という自治体も発足しています—、その人物が、全国をめぐるあげく、蓼科山にたどり着いて、人穴を見つけたという。その人穴の奥に姫君が隠されているのではないかというので、甲賀三郎は籠で穴の中に吊り下げてもらおう。吊り下げてもらった三郎は、その穴の奥に、大きな館を発見しまして、その中に閉じ込められている春日姫を助け出します。助け出された春日姫ですが、うっかりして、自分の大切な鏡を忘れてきた。そこで、鏡を取ってきてくれとなる。甲賀三郎が、鏡を取りに戻ります。そうしますと、横恋慕していた甲賀次郎が、春日姫を手に入れようとして、籠を引き上げてしまう。

結果として、この甲賀三郎が地下の世界を巡り歩きます。地獄のようなところも回るんですが、極楽浄土のような世界へと回っていくというのが、「神道集」の筋書です。<sup>ゆいまこく</sup>維曼国という名前の世界が出てきます。「<sup>ゆいまきょう</sup>維摩経」という経本の名に由来するわけですが、維摩姫という人物に出会って結婚する。そこで、楽しい暮らしを送っているんだけど、ふと自分はなぜこの穴に—地底の世界ですね—下ってきたのかということを出して、地上の世界に戻りたいと考える。そして、地上の世界に戻りたいと維摩姫に話しますと、父親が地上に出る方法を考えてくれます。彼らに与えられた衣を着ますと、大蛇の姿になった。そして大蛇の姿のまま、めぐりめぐって浅間山の麓、地上の世界に戻ることができたというんですね。こんな話があるというだけで

すが、要するに、地下にはこういう地獄や極楽を見せるような、そういう世界が広がっているんだという考え方があったというわけです。<sup>\*7</sup>

実は、鎌倉幕府の将軍によって探索を命ぜられたというのも、やはりそういう意味では、人穴は地下の世界であり、そこは不思議な世界、普通の人間の行く世界ではない、つまり神様のいる世界、あるいは神様が出現する世界、地獄のさまざまが見られる世界、ということになります。そうなりますと、先ほどの角行の「御身抜」に書かれております「浄土門」という言葉が、富士山のイメージを理解する重要なカギになってくるかと思われまます。こんなふうに考えてまいりますと、溶岩洞窟、もしくは溶岩のところにはできあがっている不思議な穴ということになりますけれども、この穴はこの世のものではないんだ。あるいはあの世への入口だと。そのことが、鎌倉時代にはすでに生まれていた話の部分であるし、それが豊かになっていったのが、室町時代から江戸時代であるのだらうと思います。

私は、歴史学者と違いまして、こういった信仰の成立年代や展開に関しましては、明確にできるだけの知識がありませんので、これは是非とも、歴史学や文学の研究から、いつ頃このような話ができあがって、どう展開していったのかといったことを確認していただきたいな、というふうに考えております。立正大学の小山一成先生が、この人穴、といいますか「人穴草子（草紙）」に関する書物をまとめていらっしゃいますが、<sup>\*8</sup> それ以外にはあまり研究がございません。文学研究の方々は、どうもこういうお話はお好きではないらしい。私も好きではないんです。と申しますのは、テレビのサスペンスを見ておりまして、今日は何人殺されたか、10人か20人かなどと楽しんでおりますから、それくらいのことは平気なのかもしれませんけれども、これでもか、これでもかと残酷な場面が描写される「地獄草子」を丹念に読むだけの気力は、今の私にはありません。是非、文学の立場から、このあたりのところを明らかにしていただきたいなあと考えております。

#### 4 聖域としての富士溶岩洞穴 ー二種類の異界ー

まとめのところに移りたいと思います。富士山の溶岩洞穴への信仰ですが、これは、どうやら二種類に分類できるかなというふうに考えております。そんなにたくさ

んあるわけではないのに、なんで二つに分けなければならないのかと、思われるかもしれませんが……。

一つは何かといいますと、胎内と呼ばれるものです。胎内くぐりと称しまして、狭いところを通り抜けて、出てくるという修行があります。岩科小一郎先生は『富士講の歴史』のなかで、「胎内の語は修験道から出ていることばである」と明確におっしゃっておられます。「入峰山伏が洞穴を抜けて身の汚れを払う行」であると。<sup>\*9</sup> ですから、生まれ変わりですよ。あるいは、清まりといいますか、そのための修行の場であったということになります。洞穴がそういう役割を果たしていた。特に溶岩樹型ということになりますと、これはほんとうに狭いですから、その狭いなかを、くぐり抜けるということは、至難の業でもございますけれども、そのような場所がいくつかございます。もっとも、いくつかと申しましても、今、調べられている数は限られておりますから、そんなに多くはないと考えていただいて結構かなと思います……。要するに胎内くぐりというのは、母の胎内を抜けて、出産するという形をとるということになります。

その中でも、<sup>いんの</sup>印野胎内と申しますのは、ほかの胎内とは違っておまして、ぐるっと回って出てこられるんです。先週の水曜日にも、行って見てまいりました。二度ほど園内に入ったことになりましたが、改めて確認いたしました。カメラを持って入ろうとしましたら、カメラが壊れるからダメだと言われました。本当に狭いんだそうです。園内に入って、胎内の前で、ちょうどお二人の先客がございまして、「狭いですよ」「大変ですよ」と声をかけられました。入口からのぞいて見ますと、本当に入口のすぐ奥が狭かったです。それはともかく、父の胎内、母の胎内を通して出てくるということになります。ここでは父親の胎内という言葉も出てまいりまして、そういう意味では、生まれてくることを擬似的に行うわけです。修験＝山伏は、これを生まれ変わり、あるいは生まれ清まりというふうに考えたのでしょうけれども、それを受け継いで富士講の行者たちも、同じ形をとったのかなというふうに思われます。

これに対しまして、「人穴」もしくは「御穴」と呼ばれるところは、狭い空間を通ることに、意味を見出していたわけではなかったように思います。むしろこれは、お籠りをする場所だと思います。井野辺茂雄先生は、『富士の信仰』のなかで、富士宮



市の人穴には「富士道者の為に籠屋が設けられ」ていたと書かれていらっしやいます。<sup>\*10</sup> 江戸時代の中頃を過ぎて、富士講の行者たちが増えていくなかで、次第次第に、人穴を一富士宮市人穴の人穴ですね一訪れる者が多くなって来る。それを受けて、人穴の中に籠屋をわざわざ造ったというわけです。中に入られた方もいらっしやるかもしれませんが、私が今立っているこの部屋と比べると、天井の高さは二倍くらい一一倍半くらいでしょうか一、かなり大きな洞穴です。入口から下へもぐるように中に入りますと、広い空間があり、真中に柱のようなものが立っていて、その周囲をぐるりと廻って帰ってくるような形になります。ずっと奥の方に行きますと、もう狭くなって通り抜けはできないんです。したがって、新田四郎忠常が激流に出合っで、それを越えてというような雰囲気はないんです。これにつきましては、洞穴の奥の方には入れなくなったのか、それとも別の洞穴なのかといった点は、改めて考えなければならぬと思います。つまり、現在「人穴」と呼ばれている洞穴が、鎌倉時代に「吾妻鏡」に載る人穴かどうかは、改めて検証しなければならない課題ではないのかと考えられます。

先ほどお話しいただいたような科学的な溶岩の研究、考古学による発掘、その他がきちんと行われれば、そういった問題も明らかになってくるんだらうと思うんです。ですが、とにかく「人穴」と呼ばれる穴は一今こう呼ばれている洞穴です一、角行による修行以来の洞穴というふうに考えられておりますし、それは要するに人穴が修行のために、籠る場所だったということになります。ですから、胎内と、精進御穴や人穴とは、違うものだと考えていいと思います。

江戸時代後半には、富士講に参加して富士山に登る人の多くが、胎内くぐりを行うようになっていきます。大衆的な富士登山が増えていくなかで、そういう形ができてきたんだらうと思います。これに対して、角行以来、つまり籠る場所として溶岩の洞穴、洞窟を考えてきたということは、これはまたもう一つのタイプであって、ひょっとしてこちらの方が古い形であったのではないかというふうに、私は考えたいと思っております。その先後関係について、ここで結論を出すことはできません。今後、自然科学的な研究などが進められていく中で、こういった課題も確認されていくのではないか、というふうに考えておきたいと思っております。

いずれにしても、生と死の間を巡る場所として、これらの溶岩洞穴が使われてきたということになります。精進の御穴は一時期「生まれる司」と書いて「生司御穴」と呼ばれました。<sup>\*11</sup> 富士山に登る人たちにとっては、命をかける場であった、あるいはひょっとすると生死をかけて修行する場であった、洞穴修行の場であったのではないかと思われるわけです。ですから、こんな穴—洞穴・洞窟—で修行するののかという問題は、ひとつ残しておかなければならないかもしれません。しかし、江戸時代、あるいはもっと古くから、洞窟での修行というものが大事にされてきた部分もあるのではないかと、私は想像しております。時枝務先生も、『修験道の考古学的研究』というご著書のなかで、「人穴」を考察の対象のひとつとして取り上げていらっしゃいます。<sup>\*12</sup>

いわば「窟修行」と呼ばれる形態が、とくに江戸時代になって増えてくる理由は、はっきりしておりまして、お寺のなかで修行できる人が減ってくる。簡単に言えば、江戸時代になりますと、それまでの寺領を奪われてしまって、朱印地ですとか、黒印地ですとか、年貢を免除された土地をわずかに持つだけですから、お寺自体がたくさんの修行者を抱えることができなくなってしまう。となりますと、自然の洞穴のような場所での修行が必要になってくるわけです。さらに、江戸時代の初めには、お坊さんだかどうかわからないような人たち、つまり半僧半俗あるいは非僧非俗と考えられる宗教者（俗聖）が、岩屋での修行をしていたのではないかと私は考えております。富士山と申しますのは、それらの中でも、とりわけ大事な場所だったのだろう。言ってみれば、そういう現世と異界の境界にあたる場所で—ここから先は大隅先生の言葉に反するようすけれども—、見えないものを見る。洞窟の中に入って、一人だけで籠るなかで、ほかの人たちには見えないような世界が見えてきたのではないだろうか。それこそが、「人穴草紙」に書かれた極楽浄土であったり、地獄であったりする。それは、この行者たちが、この世を離れて、たどり着きたいと望んでいる世界であると、このように考えてみたらどうだろうかということです。

★＝〔にんべん（人偏）＋「杓」〕

「くう」と読む。富士講独自の御見抜き文字の一つ。『民衆宗教の世界』〔日本思

想大系 67] (岩波書店、1971 年) は、「角行藤仏★記 全」を翻刻するなかで、★字について「苦行を重ねて神に等しいものとなった行者や至上対象の敬称」とする頭注を付している (452 ページ)。

#### 註

- (1) 西桂町文化財審議会の編集により、『三ツ峠山の信仰と民俗』が刊行されている (西桂町教育委員会、1992 年)。
- (2) 岩科小一郎『富士講の歴史』 (名著出版、1983 年) 97～106 ページ。
- (3) 山梨県では、平成 20 年度 (2008) より山梨県富士山総合学術調査研究委員会を組織し、富士山に関わる多面的な調査研究活動を行っている。
- (4) 『民衆宗教の思想』 [日本思想大系 67] (岩波書店、1971 年) 所収。
- (5) 前掲註 (4) 『民衆宗教の思想』 483 ページ。
- (6) 「吾妻鏡」の当該部分は『吾妻鏡』前篇 [新訂増補國史大系 32] (吉川弘文館、1964 年) ほか所収。なお、五味文彦・本郷和人編『現代語訳吾妻鏡』 7 [頼家と実朝] (吉川弘文館、2009 年) 参照。
- (7) 「諏訪縁起事」 (『神道集』)、「諏訪の本地」 (『室町時代物語大成』など)
- (8) 小山一成『富士の人穴草子—研究と資料—』 (文化書房博文社、1983 年)。
- (9) 前掲註 (2) 『富士講の歴史』 107 ページ。
- (10) 井野辺茂雄『富士の信仰』 [富士の研究Ⅲ] (古今書院、1929 年、1973 年に名著出版より復刻) 304 ページ。
- (11) 前掲註 (2) 『富士講の歴史』 100 ページ。
- (12) 時枝務『修験道の考古学的研究』 (雄山閣、2005 年) の第 3 章「修行窟と参籠行」。